魔導学園の頑張らない少年

暇な青年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔導学園の頑張らない少年

【Ｎコード】
Ｎ０７１４ＢＡ

【作者名】
暇な青年

【あらすじ】
魔導と言う名の魔法が存在する世界『エルテーミス』。そこにある魔導学園で少年、如月　柊羽とその仲間たちが織り成す学園ファンタジーです。※この小説は主人公最強（？）の上にハーレムエンド（？）の方向で進めますので苦手な方は読まないことをお勧めします。

第一魔導　主人公不在？（前書き）

あけおめで～す！
マイページの『活動報告』にも書いた通り今年はこれ一本で頑張っていきますのでよろしくおねがいしまーす。

第一魔導　主人公不在？

夜の街並みで一つの影が現れた。
影を見るからに背中には身の丈ほどの馬鹿でかい刃物を背負っている。
その影は前方……といっても、まだ数メートル先だが集団があった。
どうやら酔っぱらいのおっさん達だ。それを見た影は夜の闇に溶けるようにその場から消えるのであった。

不敵な笑みを浮かべて

◆◇◆◇◆
時刻は次の日のお昼。場所は魔導学園の二年B組。
そこでは窓側を陣取るようにそれぞれの机を合わせ、一つのテーブルにしている。その上に寮から持ってきた弁当や購買のパンなどを出し合っては食べている。

「そーいや、柊羽の奴いねぇーけどどこに行った？」

赤髪で前の方がツンツンヘアー。さらには世間一般ではイケメンに分類される程のカッコいい面構えの少年――鋪原（しきばら）　直登（なおと）は即席テーブルを眺め、いつも居る筈の柊羽がいないことに気付いた。

「あぁ、如月君なら――――――」

口に焼きそばパンを銜（くわ）えた直登の、向かい側で弁当に箸を向けてい

た少女は横の三人席の真ん中を見て、口を開いた。

「今日はお弁当を忘れたらしく、購買に走っていきましたよ」

薄紫のロングヘアーに出るところは出ている美少女――夢河（ゆめかわ）　菜月（なつき）おっとりとした性格で男女、特に男子から人気である。

今さらだが即席テーブル（縦長）の席順を説明しよう。

黒板を前に左側は窓際にピッタリとくっつけ、後ろでは直登が一人で座り、前の方に菜月が座っている。で、右側の方は三人席だが、その真ん中が開いている。

「まぁ、あいつの事だから何とかなるだろ」

「逆でしょ。あいつの事だから何ともなんないでしょ」

右側席の真ん中から左隣に座っている茶髪ショートヘアーの少年――鞘魏（さやぎ）　剣呉（けんご）は他人事のように箸を動かしながら言うと、またまた真ん中から見て右隣に座っている朱色の髪を頭の上でまとめポニーテールにしている少女――天城（あまぎ）　美緒（みお）は箸の先を剣呉に向けた。

さらに言うと二人とも美男美女。

ハッキリ言って二学年の美男美女はこの四人である。さらにはファンクラブまで存在すると言うアイドル的存在。だが、それを超える生徒がまだ二人いる。

一人は一年生の藤海（ふじかい）　智香（ちか）。

もう一人は三年生の藤海（ふじかい）　凛（りん）。

苗字を見ての通り二人は姉妹である。それも美人姉妹である。

「さて、あいつが何買ってくるか何買ってくるか賭けるか？　剣呉」

剣呉の方を見て、直登は挑発するようにニヤニヤするがいつもの事。なぜなら――――

「いや、賭けにならないだろ……何せあいつは――――」

「「「「頑張らないからな（ね）」」」」

声は見事にハモり、四人は笑って柊羽が帰ってくるのを待つのだった。

◆◇◆◇◆

そのころ柊羽は――――

「はっくしゅっ！！」

くしゃみをしていた。購買部の前で。ならなぜ購買部に行かないかと言うと正確には行けないのだ。

男女関係なく購買部に押し込み乱闘状態。これが魔導学園購買部のお昼である。そして柊羽はそれが終わるまであくびをし、気長に待つのであった。

その容姿は男としては長い黒髪で、後ろ髪は首を隠すほどである。面構えは覇気が無く、性格はよく言えば冷静沈着。悪く言えばやる気が無い。

そしてあの四人と一緒にいるためよく思い違いされるが少年――――

如月（きさらぎ）　柊羽（しゅう）は至って普通の少年であり、美男では無い、と言う事だ。

第一魔導　主人公不在？（後書き）

感想や評価お待ちしています。

第二魔導　実は留年しかけた柊羽？（前書き）

すいませーん。
二話目からいきなり話があらぬ方向に行ってしまいました。

第二魔導　実は留年しかけた柊羽？

昼休みの半分の時間が経った頃、やっと帰ってこれた俺は腕で抱くようにして抱えたパンを机に置き真ん中の席へと腰を下ろした。それを見ていた直登達はやっぱりな、と口をそろえて苦笑した。

「んぁ？　どうしたよ、いきなり笑って」

「いやなに。お前が買ってくるのが予想道理だったんでな」

直登が未だ苦笑しながらも答えるのを見て俺はあっそ、とふてくされた様な表情をして買ってきたコッペパンの袋を開ける。コッペパンの袋にはイチゴジャム、ブルーベリージャム、メロンソーダジャムと書かれおり、俺が今、口にしているのはイチゴジャム味である。

「あら、メロンソーダ味なんてあるの。初めて知ったわ」

「あぁ、なんか今日から発売だったらしいから買ってみたけど――――」

「美味しそうじゃん！　私が貰うよ」

と、有無を言わさず菜月が眺めていたメロンソーダ味のコッペパンの袋を開けた。当然、俺は慌てて止めようとしたが直ぐにやめた。なぜなら――――

「ふぉら、ふふにあふぃらめふくふぇやめふぁほうふぁいいふぉ」

「いや、何言ってるかわかんねーし」

美緒が食う方が早いことに気づいたからあきらめた。
美緒が口に頬張ったまま喋るのを見て、ため息を付く。菜月はあはは、と困った様子で笑い、直登と剣呉は視線だけ向けてトランプをしていた。そこでごっくん、と頬張っていたパンを胃に入れてから美緒は人差し指をビシッと突き立ててきた。

「だから、そーやって何でも諦めるの止めたら。それだから留年しそうになるんだぞ」

そこまで言われて俺は苦笑し、先々月の事を思い返す。
この魔導学園では名前の通り魔導――つまり魔法を扱う学園である。魔導学園と言っても普通の高校生の授業もするため通常の筆記テストと魔導の実技テストを合格しないと進級できない。が、俺に至っては筆記はそこそこだが実技がてんでダメである。進級テスト（実技）なんて4回も落ちてしまった。それを助けたのがこの四人なんだが……。
何とか言って先生に最後のチャンスを、と頼み込んで5度目のチャンスをもらいやっとの事で合格したのだ。
流石の先生たちも二学年で優秀な成績を残している四人に頼まれたら断れなかったらしいな。

で、話を戻す。なぜここまで俺が落ちるかと言うと――とにかく頑張らない。言い方を変えれば努力をしないのだ。前に菜月と直登が聞いてきたが俺はそれをはぐらかしてその場を切り抜けた。

「まったく……そーだ。いいこと思いついたぞ」

記憶を遡っていた俺は美緒の手を合わせる音で現実に戻ってきたが

同時に不安を覚えた。

うわ～……美緒のいいこと思いついた、は俺にとっては悪いことなんだがな。

まだ何も聞いていないが長年の付き合いですでに自分の身に危機が迫っていることを肌で感じ取った。

美緒は、と言うと隣にいた菜月に耳打ちしていた。どーやらまだ教えてくれないらしい。それなら……、とトランプをしている直登と剣呉に顔を向けた。

「おーい、親友。俺の身に危機が迫ってるんだが助けを……」

「いや、お前は少し頑張りを覚えた方がいいな。俺としてはそっちの方が助かる……直登、悪いな。フルハウスだ」

剣呉は手札を机の上に並び置いた。それにピクッと眉を動かした直登はトランプで隠した口元が微妙に見え、ニヤついているのが分かった。

「俺も同意見だなぁ、柊羽。あれだけの才を持っていながら何でがんばらねぇんだ……っと！」

剣呉の出したカードの上に直登は手札のカードを叩きつけた。そこには8のカードが4枚にスペードの1。つまり――――――

「なっ――――――フォーカード、だと！？」

「まいどあり」

ベロを出して勝者の笑みを浮かべる直登に肩を震わす剣呉。だがその隣でもっと肩を震わせているのが俺であるのは言うまでもない。

「くっ、仕方ない。明日の昼飯だったな」

「ゴチになるぜ」

どうやら明日の昼飯を賭けて勝負していたらしく剣呉はぶつくさと文句を言いながらトランプを片付け始め、直登はしゃーねーな、と声を掛けてきた。

「実際問題、お前あの時俺たちが頼まなかったら留年してたんだぞ。恩を感じろ恩を」

「いや、それは感謝してるが……それとこれとは話が――――」

「一緒だ！」

「うぐっ！　美緒……」

いつの間にか話が終わったらしく美緒と菜月が視線を向けていた。

「いい！　あの時私たちが頼まなかったら柊羽一人で今も一年生やってるんだぞ？　そんなの嫌だろ！？」

いつになく真剣な美緒に髪を掻いてしまう。どーやら理由はわからないがご立腹のようにだ。

「悪かった。悪かったからそんな今にも泣きそうな顔するな」

「ふぇ？」

お前……無意識かよ。菜月に確認してさらに鏡を取り出して確認って……ん？　勢いよく教室から出て行……と、思ったら帰ってきた。どうやら廊下の水道で顔を洗ってきたんだな。

「んで、何がそんなに悲しいんだ？　仮に俺が留年しても会えなくなるわけじゃないだろ」

俺としては疑問に思ったことを聞いたつもりだったが周りの直登達はあ～あ、とため息を付くのが俺にもわかった。美緒にもムッ、と睨まれそのまま知らない、と顔を背けてしまった。

「だって……学年が離れたら会う時間が少なくなっちゃうじゃん」

「ん？　なんか言った？」

顔をそむけたまま美緒が何かを口にしたことは分かったがうまく聞き取れなかった。

「何でも無い！！　それより午後の魔導実習は私と菜月の班でやってもらうからな！」

「うげっ！？　マジかよ……直登さ～ん」

「いいんじゃねーの」

「……剣呉さん？」

「良かったじゃないか、充実した授業になりそうだな」

二人の反応は予測した通り……いや、それ以上のニヤニヤ顔で答えてくる。

はぁ、俺には見方が居ないのかね……。

項垂れる俺であった。

第三魔導　魔導とは何か？（前書き）

やっと戦闘です開始です！　……と言ってもすぐに終わってしまうんですけどね。
この作品の魔導は一週間ほど前に書いた短編小説『何となく書いた戦闘物』に出た物を使っています。よろしければそちらもどうぞ。

第三魔導　魔導とは何か？

時刻は一時半を回っており、すでに昼休みは終わりを告げていた。そんな中、俺は走っていた。降り注ぐ魔導の中を必死に。

ここは魔導学園に三つ存在するグラウンドの内の一つ、第二グラウンド。

さらにグラウンド内を十等分に結界で分けられ、そのなかで生徒たちは魔導実習の授業をしていた。魔導実習とは生徒同士で実践する、と言うだけの授業であり大多数の生徒が喜ぶものである。言ってみれば体育だな。

結界内は大抵が一対一なのだが俺がいる結界だけは一対二となっている。相手は当然菜月と美緒である。

普段の美緒は魔導より接近戦で戦う事を好むがなぜか今日に限って菜月と一緒に後ろから魔導の雨を降らせてくる。

「つかれる……なぁっ！」

魔導の雨が止んだ一瞬の隙を付いて右手の人差し指を筆の様に空中に魔方陣を描いて行く。

「我、契約図を描き、此処に招来す――――炎弾（えんだん）！」

描かれた魔方陣が赤く光りだすと無数の炎の玉が一直線に二人へと飛んでいく。だが菜月は炎弾を避ける素振りを見せず、逆に美緒の前に躍り出ると左人差し指で魔方陣を描き、あっという間に完成させる。

「水壁（すいへき）」

青白く光った魔方陣から勢いよく飛び出した水がその場で波の様に高くなり、水の壁となって二人の前に現れた。
勢いよく飛んでいく炎弾は水壁に衝突するとジューっと音を立てて水壁と一緒に水蒸気となって消えて行った。
そこで終わることはなく、水壁が消えたことにより二人の姿が見えたが、菜月の後ろにいた美緒はすでに次の魔方陣を完成させていた。
あー……水壁を目隠しに菜月の後ろで始めっから魔方陣を構築、完成させてたのね。で、俺の炎弾と水壁が消えたことにより射線上が空いた、と。無理だろ。

「鎌鼬（カマイタチ）」

緑色に光った美緒の魔方陣は何かを放った。その何かは目に見えず空を切り裂く音だけが聞こえ徐々に近づき――――俺を切り裂いた。

「〜〜〜っ！」

切り裂いた、と言っても実際は頬に一閃入った程度だ。それには二つの理由がある。
一つは今着ている制服である。
この制服は対魔導制服と言って学園が独自に作り出した物で実践授業などで大怪我しないように、と防御魔導が施されているのである。
これにより大抵の魔導は防げる。もっとも、魔導による衝撃、顔や首、手などは守れないが。
もう一つの理由は簡単だ。

単に美緒が外しただけだ。さらに言えば威力も弱くしてくれたため、紙で手を切った、程度の痛さである。

「ってぇ〜〜」

地味な痛みに顔を歪めていると菜月と美緒が近づいてきた。

どうやら終わったなぁ。

ふぅ、と小さくため息を付くとコツンと額に軽い痛みが襲った。どうやら美緒が小突いたらしい。

菜月は手のひら大の魔方陣を描くとそのまま切り裂かれた頬に当てた。

「我、契約図を描き、彼の者を癒す――――回復（ヒール）」

魔方陣は青白く光ると切り裂かれた頬がスッキリと治っていた。

同時に菜月の横をヒラヒラ飛んでいる手のひら大の可愛らしい女の子に人形に目を向ける。

「さんきゅ、キュオン。それに菜月」

キュオンと呼ばれた人形は精霊と呼ばれ、魔導を使うために契約しないといけない物である。精霊と言っても大きく分けて五種類存在する。炎・水・風・土・雷と分けられ、契約した属性の魔導が使える。

しかし契約と言うのは簡単なものではない。

今は簡単に説明すると契約の簡単な順に炎・水・風・土そして雷である。特に雷は契約が難しく契約者は数少ない。契約内容はまた別

の時に説明するとしよう。

さて、魔導とは言ってみれば精霊の力。精霊と契約し魔方陣を教えてもらい、その魔方陣を描く。

描いた魔方陣に自然エネルギーと呼ばれるマナと己の中にある精神魔力を使って初めて魔導を使うことができる。

しかし精神魔力と言うのは無限にある訳じゃない。一般の魔導を使えない人は数字にして１０００。これはゲームの様に魔導を使うたびに減っていき、魔力が空になったら０となり、次の日まで使うことはできない。さらに一日ですべての魔力が回復することはない。

色々あって俺の精神魔力８２０と一般の人より低いという何とも情けない数値だ。菜月は２１００で美緒１８００である。これはずっと前に聞いたからあってるはず。成長してなければ。

キュオンはポッと顔を赤くすると光となって消えてしまった。

「で、なんであんたは防御魔導を使わなかったの！？　あんたなら間に合ったでしょ」

「いや～、無理だって。仮に間に合ったとしても次の魔方陣を菜月が描いてたじゃん。二つ続けて守れるほど俺は強くないし、逆に俺に二回も止められるほど二人は弱くないからな……あきらめ――――ンギャ！？」

「あきらめんな！　まったく……」

頬に一発入れてから美緒は結界の外に出てしまった。外では今のを観戦していたのか直登と剣呉がおり、手を振っていた。俺は殴られた頬を擦りながら苦笑し、菜月と一緒に後を追いかけるのであった。

第四魔導　寮が豪華ホテルなんだがどうする？（前書き）

いまさらですが文章が酷いですね……ごめんなさい（笑）

第四魔導　寮が豪華ホテルなんだがどうする？

午後は丸ごと実践授業と言うわけであの後、俺は直登と一対一し、剣呉と菜月のペアと戦闘。最後に剣呉と組んで美緒と直登ペアと実践授業を終え、今は寮の部屋にいる。魔導学園に在籍している生徒は皆、寮生活である。男子としては嬉しい男女混合の寮で、ハッキリ言って高級ホテルじゃないかと思う生徒も少なくないはず。

そんな中、四〇二号室で直登、剣呉と一緒にベットの上からテレビを眺めていた。

ここ四〇二号室は唯一の三人部屋と言うだけあってかなり広い。他の部屋は二人部屋なためベット二つとキッチン、それと小さいテーブルと椅子、最後にテレビだがここは違う。ベット三つに、それを並べてもまだ余る広さ。加え、キッチンに結構デカい収納棚。テーブルと椅子もあり、打って付けは薄型の大液晶テレビ。

生徒によっては金を払っても住みたいだろう。ちなみに朝・昼・晩と寮の一階に行けば食堂がある。料理ができない生徒はそっちに行くのだ。

さて、時刻は七時。夕飯時と言うことで俺は二人と共に部屋を後にした。

◆◇◆◇◆

「まったく、毎度のことながらお前らと居ると疲れるな」

ご飯を食べながら愚痴る俺に対し、言い返せない四人がそこにはいた。場所は食堂の一角なのだが周りの目がとてつもない。ファンク

ラブの会員が黄色い声でこっちに声を投げたり、男子生徒などは俺と一緒にどうですか？、いや俺と、など誘われ夕飯を受け取って飯を食べるまで１０分かかった。

まったく、モテるってのも楽じゃないね。

「で、なんだっけ？　大事な話がどうとか」

味噌汁を啜りながら美緒と菜月に視線を向けた。先ほど食堂に入ったら二人にそう言われたのだ。

「柊羽……明日、本気であたしたちと戦って」

「……は？」

食べ終えたお椀を重ねていた手が止まり、そのまま俺の視線は二人へ自ずと向いてしまう。

それもかなりマジなようであちらも真剣な眼差しで返してくる。

はぁ……一応、これでも頑張ってきたつもり、なんだけどねぇ。

「あたしたち……と言うことは二人とか？」

「いや、俺たちもだ」

俺は予想外の方向からの返しに面喰ってしまった。

どーやら、直登と剣呉も俺と戦いたいって奴ね。まったく、俺はお前と戦いたい――――って、どこの漫画だよ。

「あらら、直登も剣呉もどーしたん？　いつもなら言わないのに」

「いやぁ、魔導師として強い相手と手合せしたいと思うのはいけない事なのか？」

直登はデザートのバニラアイスをスプーンですくい上げ、それをこちらに一旦向けるとパクリと口に含んだ。剣呉も何も言わないが多分同じ理由なんだろう。あっ、魔導師ってのは魔導を扱う者をさす。

「……」

これははぐらかせる状況じゃないよな……あんな思いはしたくないんだけどな……

脳裏によみがえってくる子供のころの記憶。
ハッキリ言って思い出したい記憶じゃない。俺はこ直登と剣呉とは小学４年からの付き合いだがそれ以前が、な。
そーいや、菜月と美緒とは中学に入ってからの付き合いか……意外と長いな。

「分かった。ただし、時間は朝の人がいない第三グラウンドで」

渋々了承の言葉を口にすると直登と剣呉はフッと微かに笑い、菜月と美緒はやった！と喜んでいるのだが……この美男美女がこの表情を出すと――――

「「キャァァァァァ！！？」」

「「うぉぉぉぉぉぉ！！？」」

と、食堂にいる生徒ほぼ全員が発狂し、人の波となって迫ってくる

ため俺はさっさと食器を返してその場を後にするのであるが、食堂に置かれている薄型テレビに目を向けた。

『犯行現場に来ています。ここで被害者は倒れているのを発見しました』

またか。物騒な世の中になった物だ、と言いたいがずっと前からだな。

今テレビでやっているのは最近から起きている連続事件である。人が死んだわけではなく、被害者の精神魔力が根こそぎ取られ、さらには契約している精霊を連れ去られてしまう、という実際ではありえない状態で路上に倒れていると言う物だが、これで連続して１０人目である。目撃証言も無く、このままだと手詰まりになるかもな。

そんなことを食堂の入口で考えているうちに何とか出てきた直登たちに捕まり、部屋まで連行されるのであった。

……おい！？　なんで俺が裏切り者みたいな感じで連れてかれてるんだよ！？

――――――と言うのは疲れるためため息を付いて諦めるのであった。

第五魔導　夜の日課は……？（前書き）

読んでくださっている読者の皆様。暇な青年です。
皆様のおかげで『小説家になろう　勝手にランキング』と『ジャンル別　日間ランキング』で１０位までに入ることができました。（昨日は１１位でしたが……）
『勝手にランキング』のジャンル別（学園）では４位と、嬉しい順位でした。

これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

第五魔導　夜の日課は……？

夜の学園と言うのはライトアップされてて意外と幻想的だなぁ、とキャラに合わないことを思いながら日課の夜の散歩をしている。魔導学園の敷地は結構広く、大型ドーム三個分の広さがある。故に散歩するのにはもってこいなのだが……実は散歩じゃなかったりして。

俺は今、第三グラウンドの横にいる。第三グラウンドは周りが土手の様に落差があるところに作られている。そのため自ずと土手を降りていきグラウンド内に入る。魔導学園のグラウンドは自主練してもいいように二四時間使えるのである。校舎の方はさすがに入れないが。

とにかく俺は第三グラウンドに入ると軽く首を回し、手首を回し、体をほぐす。

それから俺は右手左手の人差し指を立て、左右同時に自分を中心に五角形の図になるよう魔方陣を描いていく。

「我、契約図を描き、此処に招来す」

五つの魔方陣を一気に発動させる。魔方陣はそれぞれ赤、青白、緑、薄茶、黄色に光り、次の瞬間それぞれの魔方陣からそれぞれの色の光を夜空に放つが光は魔方陣の下へと返ってきた。

「我らが主、よくぞ呼んでくれました」

光が消え、目の前の魔方陣の上には可愛らしい人形――精霊が浮遊していた。

今口を開いた彼女はディーネと言い、足元に付くほどまで伸びた青い髪が特徴である。精霊と言っても女の子なので胸も微妙にあります。菜月の精霊キュオンも同じく。

「久しぶりだなディーネ。それにお前らも」

俺は他の魔方陣の上に浮遊している精霊たちに視線を回す。
赤髪ツンツンヘッドでカッコ可愛いシュラ。正式な名前はフレアート
緑髪ツインテールの大人しい雰囲気のルフ。正式な名前はシルフ
茶髪で額に一角獣の様な角を持ったムー。正式な名前はノーム
黄色髪で右耳にピアスの様な物を付けているライ。正式な名前はライボルト
どれも俺と契約した契約精霊である。

今よく見てみるとファンタジーゲームの様に耳が尖がってるな。ムーの角を見てもしかして、って思ったが。気づくの遅かったな俺。もう何年も一緒のはずなのに……

「おう、シュウ！　今日の戦闘でのあの負け方は在りえねーだろ！？」

「シュラ……いきなりダメ出しは止めてくれ」

可愛らしい手でビシッと俺を差してくるシュラだが……可愛くて許せてしまう。が、分かっての通り性別は男だ。

「シュラはいいじゃない使ってもらえるだけでも。私やディーネ、ムーなんてめったに使ってくれないのよ？」

「偶にでも呼んでくれれば良いだろ。俺なんてこんな時じゃないと

呼んでくれないんだぞ」

しゅんとしたライを何とか慰めようと俺は頭をなでる。するとそれを見たディーネやルフは私も私も、と強請ってくるので大変だ。無言だがムーも構ってくださいオーラが目に見えている。

「ムーも言葉で言ってくれれば分かりやすいんだけどな」

ライ、ディーネ、ルフ、ムーの順番で頭を撫でていく。

シュラの方はいつの間にか俺の肩に乗っかってぶつぶつと魔導実習の事を掘り返しているがもちろん無視。ここで話に乗っかったら再度ダメ出しが来るからな。

そんなこんなで俺はいつもの日課を始めることにした。あいつらには散歩と言っているが先ほども言った通り散歩ではなく自主練だ。まぁ、自主練と言うほどの物でもないけどな。実際使うことなんかないし。

とりあえずグラウンドの中央で腰を下ろす。シュラも肩から降り、ほかの精霊たちの下へと駆け寄った。

「それでは……主よ。いつものように頼みます」

ディーネはこちらを見て言ってくる。それに対し俺は無言で頷くと目を閉じ、そのまま体の中に存在する精神魔力を縛っている『鍵』を解除した。

鍵を解除した瞬間、俺を中心に風――――と言うより風圧が広がり第三グラウンドの周りに植えてある木々がざわついた。

「流石は俺たちの主なだけはある」

感心するようにライが呟く。それに賛同するように周りも頷いているのであろう。目を瞑っていても気配でわかる。それと、午後の授業の時に俺の魔力は『色々あって８２０』と言ったがあれは正しくない。

俺は生まれつき精神魔力が高く、それを隠すため『鍵』と言う形で精神魔力を封じている。実際の精神魔力は５０００と言う自分で言うのもアレだが化け物だ。

まぁ、おかげでこいつ等とも出会えたし結果オーライ、ってことで。

「なにを考えてんの、柊羽？」

「ん？　精霊（ルフたち）の事について」

「私たちの事？」

「おう」

ルフたちは小さいから見上げるようにしている。どーも可愛い過ぎて和んでしまう。

ほわぁー、としていたのが悪かったのだろうか？　ディーネが俺の事を呼んだ。

「丁度良いですね。主よ、精霊の契約について説明してください」

「……はい？」

「ですから説明です。我らが主ならそれぐらいできますよね？」

「……まぁ」

良くわからないが説明すればいいんだな？

こうして精霊たちと学ぶ夜の精霊講義が始まった。

第五魔導　夜の日課は……？（後書き）

――後書きラジオ――

暇ねん「はい。この回から始まった後書きラジオです！　私の前の前の前に書いていた『俺が姫の婿候補！？』でもやっていた物です。読んでくれた人は知っている！……はず」

柊羽「うわー……めんどくさいの始まったよ」

暇ねん「はい、そこうるさい！ここでは『この回の反省』や『感想などに来た質問』などに答える場です。感想一覧でもお答えしますのでご安心を」

柊羽「うわっ！？　頑張るねぇ～」

暇ねん「おまえもパーソナリティーだから頑張れよ」

柊羽「だが断る……なんちって」

暇ねん「……こほん。興味の無い方はスルーしてよいので暇な人だけ読んでください！　それと感想・評価おまちしています！」

柊羽「……言うタイミング遅くない？」

第六魔導　精霊講義のお次は？（前書き）

グダグダ感半端ないですね。今思ったけど戦闘が少ない……次の話でやっと、ですよ（苦笑）

第六魔導　精霊講義のお次は？

さて、五月の夜に精霊たちと一緒に精霊講義と言ういきなりの展開だがまぁ、断る理由も無いので先ほど問われた『精霊との契約』について説明しよう。

「あー……っと、精霊との契約っていうのは言ってみれば精神魔力の交換だ……だよな？」

「その通りですよ主」

確認のためディーネに聞いてみると頷いてくれた。

さて、話を続けよう。

「自分の持つ精神魔力が高ければ高い程、上位精霊との契約を結ぶことができる。で！　契約に必要な魔力は最低でも１０００。一般の人で考えれば下級精霊一体と契約がギリギリできる。ただし、魔力が足りたからと言っても契約ができる訳ではなく、精霊にも拒否権がある。まぁ、拒否されたら終わり。それと偶に向こうから契約内容を指定してくる場合がある。その内容を了承できれば魔力が足りなくても契約を結べる」

「その通り。それじゃ柊羽、精霊の階級と階級で何が変わるのかしら？」

うんうん、流石は主、って満足しているディーネの横にいたルフがツインテールを揺らして右手を挙げた。これじゃマジで生徒と教師の図だな。ははっ。

「えー……たしか四つに分けられ下から下級精霊・中級精霊・上級精霊……さいごにそれぞれの属性の精霊を束ねる五人の精霊――――」

一瞬だけ俺の前で生徒の様に俺の説明を聞いている五人の精霊を見下ろし内心でため息。

なぜかって？　簡単だ。それは――――

「五大精霊」

だからである。

「で、階級の違いは……言ってみれば覚える魔導の種類。例で言うと下級は１０魔導しか覚えていなくても、中・上級なら２０、３０と魔導を覚えている。つまり、上の階級の精霊と契約した方が強い魔導を使うことができる」

「さっすが柊羽せんせ～」

自分たちの事を言われたのが嬉しいのか満面の笑みで両手を上げるルフに可愛いと思ってしまう。思うというより可愛いな。

「それじゃ――――」

「まったまった柊羽せんせ！」

……さっきから思うのだがいつから俺は先生になったんだか。

「はい、シュラ君？」

「普通の人はどれくらいの精霊と契約できるんだ？」

「そうだな……生まれつき精神魔力が低い人もいるからなぁ……そういった人ならさっき言った通り向こうが提示してくる契約内容によっては結べるから……普通は一つで、魔力が２０００以上あれば二つ。普通はここまでも十分凄いんだがうちの学園には魔力を３０００の生徒が数人いる。そいつらは三つ契約してるんじゃないか？」

少なくとも俺は一人心当たり、と言うより契約している人を知っている。

「ほぉ～。それじゃ、五つ……それも五大精霊と契約している柊羽せんせは凄いんだ～」

「うぐっ……それを言うな。学園では頑張ることの無い下の下レベルの男子生徒なんだからな？」

そういうとシュラはブーブー、とブーイングするが取りあえず無視。さて、これで十分かな？　なんて自己満足をしていたらディーネ達の表情が一斉に険しくなった。俺の方でも遅れながらその理由が分かった。

そのうえでシュラがもう一度しかし険しい顔つきで質問してきた。

「最後に柊羽せんせっ。次にするべき行動は？」

「そうだな……取り合えずめんどくさいのに巻き込まれる前に撤収だな。お前たちは戻ってくれ。俺は鍵を掛けるから」

イメージで言うと現在進行形であふれ出る精神魔力を窮屈な壺に封じ込んで鎖でぐるぐる巻きにして南京錠を掛けたようなものだ。ここまでの事を時間で5秒。精霊たちもすでに姿を消していた。

「さて――――――」

俺としてもさっさと部屋に戻りたかったため、できるだけいつも通りの足取りで第三グラウンドから出て土手を上ったのだがタイミングが悪かった。

「この学園の生徒か？」

土手の上には一定間隔で電灯が設置されている。それなのに声を掛けてきた相手のシルエットは見えるが顔の表情や服装などは闇の中にいるようでまったくわからない。

分かるのは――――――相手の背中には身の丈程の刃物を背負てるってところだな。

やれやれ、本当にぶっそうな世の中だよ、と心の中で運の無いことを呪う俺だった。

第七魔導　近頃噂の連続事件の犯人？（前書き）

美緒の一人称を「私」から「あたし」に訂正しました。

第七魔導　近頃噂の連続事件の犯人？

前回の最後とは場所は変わって柊羽が部屋を出て行ってから三十分経った頃の四〇二号室である。
部屋の中には直登、剣呉、菜月、美緒がくつろいでいたのだがいつもより柊羽の帰りが遅いことに菜月は気付いた。

「そういえば如月君は遅くないですか？　いつもなら二十分程度で帰って来るのに……」

「そーいや、そーだな。でも柊羽の事だしそこらへんで休んで……よっしゃ！　クイーンを討った！」

ベッドの上でチェス盤を広げてクイーンをナイトで落とした直登はニヤニヤとしていたが、対戦相手の剣呉は焦るそぶりも見せないでルークを前進。移動先はキングの射程圏内。

「チェックメイトだ」

剣呉の宣言に直登は盤上を見渡し――――――絶望した。横に逃げてもルークに打たれ、縦・斜めに逃げてももう一つのルークに打たれるという何とも言えない手であった。

「くっそー……明日の昼飯がぁ」

「これで昼のトランプで負けた分を取り返したな。心配なら探してくればいいんじゃないか？」

顔だけ菜月に向けるがその間に美緒が割って入る。

「剣呉って意外と酷いこと言うよね。こんな夜の遅い時間に女子一人で出歩かせようなんて」

「そう言われても、な。イベント時以外は学園の敷地には関係者または保護者しか入れないし、第一相手がだれであろうと夜の七時以降は門も閉められ結界を張られるんだぞ？　不審者なんて入って来るか？」

「確かにそうね。仮に他生徒から何かされそうになっても二学年でもトップクラスの菜月がやられる訳がないわね。でも！　心配だから探しに行くなら私も行くわよ？」

「ありがと美緒ちゃん。それじゃあお願いできる？」

菜月の頼みに胸を張って答える美緒。その横で薄情な男どもはチャラになった明日の昼飯賭けてた二回目のチェスが始まっていた。もっとも、薄情と言うより菜月と美緒の実力なら問題ない、と安心しているから言っているだけである。

口には出さないが……

◆◇◆◇◆

「失礼。おかしなことを聞いたな。ここに居るってことは学園の生徒か教職員だけだからな」

以前として姿はシルエットでしか確認できないが声で相手が男だってことは分かった。さて、これからどうするかな……

「そーゆうそちらは見た感じ部外者ですよね？　一体どーやって入って来たんですか？」

と、バカ正直に聞いてみて思ったんだがそれを教えてくれる奴なんていな――――――

「いやなに、探し物の気配を感じたんでね。失礼ながら侵入させてもらったよ。侵入方法は言えないけどね」

教えてくれたよ？　いや、教えてくれたとまでは言えないがな。

相手の男性は一歩も動かずに今のところ俺と話し合いと言うテーブルについている。が、俺の方は少し、ほんの少しだが後ろに足を引いている。なぜかって？　簡単だ。あいつの存在から何とも言えない殺気が放たれてるからな。まったく、日ごろの行いは悪くないと思うんだがな……

今の気持ちを直登たちが聞いたら嘘つくな！って怒鳴るだろう。そんなことはさておき、俺はシルエットのみの男から目を離さないように気を付けている。

「さて、さっそく探し物について君に聞きたいのだが……」

刹那、空気が重くなった。言い方を変えれば相手から発せられる殺気が俺を圧迫している？ってところだな。

俺としては顔に出てないことを祈るかな。

「この学園で一番魔力の高いものを知っているか？」

「あぁ……学園にいるやつならみんな知ってるさ」

「ほぉ……そいつの最大魔力は？」

「……３０００」

今言ったことは全部事実である。誰の事であるかも俺はよく知っている。

そこまで言って俺は冷や汗を掻いていることに気付いた。最小限の動きでそれを拭うと男性は少しの間黙り込んだ。

もしも探し物ってのがあの人なら大変だが……ここで俺が頑張る訳にもいかないよな。少しなら頑張ってもいいができればシュラのみで他の精霊は使いたくない。

こんな時でも頑張りたくない、と思ってしまうのは俺ぐらいだろうと自嘲してしまう。しかし俺の予想はどうやら違ったようだ。

「違うな……それが本当なら魔力が少なすぎる」

魔力が少ない？　魔力３０００と言えば世界でも数十人程度だぞ！？　……と驚いてみたが俺的には確かに少ないよね？　だって俺５０００だし。

なんてこと言えるはずもない。

「どーやら探し物ってのはいなかったらしいな？　どうだい？　このままお帰りになってくれるのか？」

こっちとしてはそれが一番ありがたい。面倒事にも巻き込まれず（……いや、巻き込まれてるけどね）尚且つ頑張らない方法だが――

――現実は思い通りにいかない物だって事だ！

男の返事を聞く前に俺は勢いよく土手の下に飛び降りた。次の瞬間、先ほどまで俺が立っていた場所が何かによって抉られていた。土手を舗装しているコンクリートが、である。

「残念だがそうはいかないな。君には口封じのためここでの事を忘れてもらう。ついでに魔力と精霊も貰って行く」

土手の下――――俺を見下ろしながらシルエットのみの男は右手をゆっくりと持ち上げると背中の刃物の柄に手を掛けた。どうやら近頃噂の連続事件の犯人らしいな。

「記憶を消すって……ニュースで流れてたか？」

一人呟いてみたが答えが返ってくるわけないので俺は土手に立っている男を睨んだ。

いくら１０時近くても爆発音があれば職員が来るだろ。それまで何とか耐えれば――――

「――――うぉっ！？」

背中から抜き取った刃物を振りぬいただけの動作。それなのに剣圧と言うのか風圧と言うのか悩みどころだがそれが俺を襲った。突然の出来事に俺は両腕で顔を守るようにして目を瞑ってしまった。

それがいけない事だとわかっていながら

「探し物は確実にこの学園に存在する……一人ずつ潰して行けばいいからな」

男の声に驚愕した。先ほどまでは距離があったから声が遠くから聞こえた。しかし今の声は目の前から低く聞こえた。つまり――――

「その手始めが……お前だ」

目の前で刃物を夜空に向かって高く掲げているのだ。

男の言葉が切れると同時に掲げた刃は真上から俺に向かって落ちてきた。

第七魔導　近頃噂の連続事件の犯人？（後書き）

――後書きラジオ――

暇ねん「はい。後書きラジオです」

柊羽「しょっぱな忘れて第二回をやらなかったな」

暇ねん「うっ！　すいません」

柊羽「まぁ、俺としては仕事が減るから願ったり叶ったり、だな」

暇ねん「させんよ！　では、ラジオです。とは言っても何もないのでこの小説を『お気に入り登録』してくださってありがとうございます」

柊羽「評価も貰ったしな。ランキングでも“今”は人気じゃん」

暇ねん「……今、を強調するね、きみ」

柊羽「気のせいだって。ほら、ほかにも報告があるだろ」

暇ねん「そうです。今は冬休み、と言うことで毎日更新していますが１０日から学校が始まるため2日に一回。もしくは3日に一回と、毎日更新はできません。楽しみにしてくださっている読者の方にはご迷惑を掛けます」

柊羽「それでも9日までは毎日なんだろ？　めんどくさいねぇ」

暇ねん「おい、主人公！　ではまた明日！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0714ba/

魔導学園の頑張らない少年

2012年1月6日12時35分発行